とある山奥のそのまた奥に、ひっそりとたたずむ館がひとつ。
その名を「ミステリーの館」
ミステリーをこよなく愛する者達が、今日もまた足を踏み入れるのだった。
重い扉をノックすると、ギィーと悲鳴を上げながら扉はその体を退けた。
「いらっしゃいませ。当館管理人兼お世話係りのエイカでございます。
当館ではご来訪いただいたお客様に、
ミステリーを心ゆくまで味わっていただいております。」
さぁ、お客様どうぞミステリーの扉をお開けください。

事件部屋
～ＯＬの悲劇～（２）
～熱帯魚はお好き？～（４）
～口は災いの元～（６）
～怪盗登場！～（８）
～スリ集団を捕まえろ！～（10）
～クリスマスケーキ争奪戦～（12）
～最後の晩餐～（15）
～順番が肝心！～（18）
～消えたラブレター～（21）
ショートストーリー
～消えたラブレター続　消えたメモ～（23）
～三つ子の王子様～（28）
あとがき（34）

では、お客様の頭の体操と参りましょうか。
ごくごく初歩的な問題です。

～ＯＬの悲劇～

とあるオフィスで倉山聖子（29）ＯＬが、何者かに殺害された。
その手には携帯電話が握られ、謎の番号が残されていた。
彼女が殺害された時刻に、アリバイが無いのは、次の３人。
さて、犯人は誰？

残されていた番号

| |
|---|
| １１３７７７ |

アリバイの無い３人　元彼　杉川勇（28）
上司　丸山進（40）
お局　木村未央（32）

エイカよりお客様へ
・残されていた番号は、もちろん誰かの電話番号ではありません。
・被害者は、かなりのメール魔だったらしいですよ。

でわ、真実の扉を開いてみましょう・・・・・

さて、名刑事にはライバルが居るのもミステリーのお約束ですよね。
刑事とくればやはり泥棒。では、颯爽と登場してもらいましょう。

～怪盗登場！～

都心にある、有名美術館の赤坂館長のもとに、１通の手紙が届いた。

AKASAKA館長様

今夜、「いえくうひきすくつ」

を頂きにあがります。

怪盗　ジャスティス

「怪盗だとう？！」
黒川刑事は手紙を読んで、声を荒げて叫んだ。
「それで、この怪盗が狙っている、『いえくう・・』とはなんですか？」
「さぁ？解りません。我が美術館には、そのような物はありません。
しかし、怪盗が狙ってきそうな品ならいくつかあります。次の３つです。」
「なるほど。どれも、高そうな物ばかりだな。それで、赤坂館長。
うん？赤坂・・ＡＫＡＳＡＫＡ・・そうか！こいつの狙いはこれだ！！」
さて、怪盗ジャスティスの狙いはいったいなんだろう？

・絵画「美しき風景」
・宝石「乙女の涙」
・銅像「考えた青年の像」

エイカよりお客様へ
・「ＡＫＡＳＡＫＡ」館長さんの名前をローマ字で逆さに読んでも、赤坂なんですよ。

でわ、真実の扉を開いてみましょう・・・・・

では今回は、名刑事好きのお客様へ向けて、名刑事ミステリーを3本、どうぞ。

～スリ集団を捕まえろ！～

黒川刑事は通勤中に、満員電車の中で自分の懐からスルリと財布を抜く、1人のスリを捕まえた。
駅員から話を聞くと、どうやらこのスリは、この近くを荒らしまわっている、スリ集団の1人と分かった。
そして、この捕まえたスリの男が、これから他の仲間と接触する事を吐いた。
黒川刑事は、この男と共に電車に乗り込み、接触してくる仲間を捕まえる事にした。
2人は、1番後ろの列車に乗り込み、1番後ろの座席に座った。
通勤時間帯を過ぎたせいか、この列車に2人以外は、誰も乗っていなかった。
電車が発車すると、男は口笛を吹き始めた。
動き出してしばらくしてから、学生風の男がヘッドホンから大音量の音楽を洩らしながら入ってきた。
しかし、男に接触することなく、ドアの近くの座席にドカッと座った。
しばらくしてから、アタッシュケースを持ったサラリーマン風の男が入ってきた。
やはり男に接触することなく、前の方の座席に座った。
今度は、両手にいっぱい紙袋を下げた中年の女性が入ってきた。
だが、やはり男には接触することなく、座席に両手の荷物を広げて座ってしまった。
その後は、誰もこの列車に入ってくることなく、とうとう男に接触してくる人物がいないまま、駅に着いてしまった。
仲間は、来なかったのだろうか？黒川刑事はそう思いながら男の顔を見た。
すると、男は、ニンマリと笑みを浮かべている。
そう、仲間は現れたのだ。
しかし、どういうわけか、この男に接触するのは危険だと、察知されてしまったのだ。
だが、この男はずっと口笛を吹いていただけで、刑事がいるなどと一言も喋ってはいない。
黒川刑事は、少し考えた後、ハッと気がつき、仲間も無事逮捕した。
さて、仲間は誰だったのだろう？

・学生
・サラリーマン風の男
・中年の女性

エイカよりお客様へ
・男は、刑事がいることなど一言も話すことなく、口笛をずっと吹き続けていました。

でわ、真実の扉を開いてみましょう・・・・・

～三つ子の王子様～

「大漁♪大漁♪」
両手に山ほどのチョコを抱えながら貴之は、満面の笑みで言った。
「ケーンくん♪一緒に食べるかねぇ？！」
「（嫌味か！）オレは甘い物大嫌いなの！！」
健は眉間にしわを寄せ、そっぽを向いたが、
「よく言うよ！ファミレスでいつもパフェ食ってる奴が。」
痛い突込みを受け、肩を落とした。
「どぉぉせどぉぉせチョコなんて・・・」
「あぁ！おい！グチってる場合じゃないぞ！！　あれをみろ！」
そう言われ、健は貴之が目を見開いて見つめてる先を見た。
「明美じゃんか。」
そこには明美が階段の踊り場で、男子生徒と何やら話をしている姿があった。
「別に珍しい生き物でもねーべ。」
明美が男子生徒と2人っきりで、話してるのが貴之は気に入らないのだろうなと、健は飽きれた。
「だぁぁ！よく見ろ！明美が手に持っているものを！！」
赤いリボンをした可愛らしい小さな箱を、男子生徒に差し出していた。
「ほほーん。明美さんも隅に置けませんなぁ♪」
「あぁあぁあぁぁ！そんなぁ！！　ケーン！俺はおしまいだぁぁぁ。」
「あーもっ！ウザイ奴だなぁ。お前こそ、よく見てみろ！」
「ほぇ？」
健に促がされて、明美のほうを貴之は見なおした。
すると、男子生徒は明美からその箱を受け取らずに、走り去ってしまった。

「残念だったなぁ。まぁ、気を落とすなよ♪」
「大丈夫！俺がいるからな！！」
2人は階段を下り、そういいながら話しかけた。
明美はブレザーの右ポケットに、先ほどのプレゼントらしき小さな箱をしまい、
ニタニタ笑っている健に、少しムッとしながらも、怒ることなく2人に言葉を返した。
「ありがとう。でも、貴之にはたくさん女の子がいる様よ。健はいないみたいだけど。」
貴之はハッとし、抱えていたチョコを健に押し付けた。
「や、やだなぁ。これ実は全部、健のなんだぜぇ！」
明美は貴之が健に押し付けたチョコの1つを摘まみ上げながら、
「へぇー。佐々木君はいつから『深田君』になったの？」
チョコの箱には『深田君に愛をこめて』と、書かれてあった。
「さぁー。」
健は押し付けられたチョコの重さにも、貴之にもうんざりだった。
「はぁー。あなた達と話してると疲れるわ。まったく。変な誤解してるようだけど、これ